

福島区歴史研究会 会報

第二号

2014.2

目次

「立川文庫」と中江町	津山泰裕	1
下福島公園の今昔	岡倉光男	4
はじめに		
一 公園の出来るまで		
二 下福島公園の誕生		
三 戦後初の大坂本場所開催		
四 公園内の整備進む		
五 公園現況とエピソード		
結び		
区民まつり初参加	末廣 訂	13
吉野小学校「子供お楽しみ会」に協力して	武田 博	15
下半期の事業		16
下半期の活動記録		16



「立川文庫」と中江町

津山泰裕

最近では立川文庫といってもあまりぴんと来ないかも知れないが、大正期に大阪の出版社・立川文明堂から、「猿飛佐助」や「霧隠才蔵」といった小型講談本が刊行された。これが爆発的な人気を呼び、一世を風靡する。この講談叢書が「立川文庫」である。

立川文庫の執筆者については、加藤玉秀ぎよくしゅうこと二代目玉田玉秀齋を除いて、ずっと不明のままだったが、昭和三〇年代に入り、詩人で評論家でもあった足立巻一あだちけんいちによって、徐々に明らかになる。足立は当時すでに入手困難であった立川文庫を探し求めるうちに、執筆者の一人、池田蘭子に出会う。池田蘭子は玉秀齋の義理の孫で、後に足立巻一のすすめにより『女紋』おんなもん①を上梓する。

立川文庫の最後の執筆者、池田蘭子（明治二六年〜昭和五一年）の『女紋』にこんな一節がある。

明治四五年（一九一二）、「玉秀齋一家は、当時阿鉄が住んで

いた西野田近くの中江町に移っていった。(中略)玉秀齋の中江町の家には、大阪じゅうの本屋が、原稿争奪に殺到した」。

ここでいう中江町は、野田新橋筋商店街のあたり、現在の町名でいうと福島区吉野になる。

池田蘭子の生涯は波乱に満ちたものだった。

明治二九年(一八九三)、愛媛県今治市片原町の回船問屋「日吉屋」の山田敬(蘭子の祖母)が、四国を巡業中の講師、玉田玉麟(ぎょくりん)(のちの二代目玉秀齋)に入れあげ、莫大な財産を投げ捨てて、大阪へ出奔する。この時、敬は四三歳、玉麟は四一歳であった。

敬の出奔により、今治には婿養子の夫・又介と五人の子供が残された。蘭子の母で敬の長女・寧は裁判所の判事に嫁いでいたが、このことにより離縁される。その後、「日吉屋」は破産、又介は病死する。

敬は上阪後、次々と子供たちを呼び寄せ、西区阿波堀通の風呂桶屋・甲山茂八店の二階に居を構える。当時大阪では講談が人気で、それに目をつけた敬は、玉麟に二代目玉秀齋を名のらせると、講談を原稿化した「速記講談本」を貸し本屋に持ち込

んだ。

長男の阿鉄(おてつと読む、号は酔神)をはじめとする敬の子供たちも「速記本」の制作に加わり、玉田玉秀齋一家が立川文庫の主な執筆者になる。

評論家でもあった中野好夫は『現代の作家』②のなかで、「明治、大正、昭和の文化を語るのに、「立川文庫」は見逃すことのない存在である」と記した。湯川秀樹をはじめ、中野重治、高見順、丹羽文雄、石川達三、椎名麟三、川端康成、大岡昇平なども、こぞつて立川文庫を愛読したという。立川文庫は大正期に少年時代を過ごした世代にとっては、忘れられない講談叢書となったようだ。

池田蘭子の学力は優秀で、小学生の頃から原稿にルビをふる仕事を手伝い、のちに梅花女学校にすすむ。女学校四年生のとき、船場の郵便局長、池田美雄(のちに九条郵便局長)と結婚し、叔父の遺児たちを引き取り育てる。

足立巻一は『立川文庫の英雄たち』③のなかで、立川文庫のブームが去った後の蘭子の暮らしぶりに触れている。それによると蘭子は、大正一〇年(一九二一)、「野田に新しい商店街」

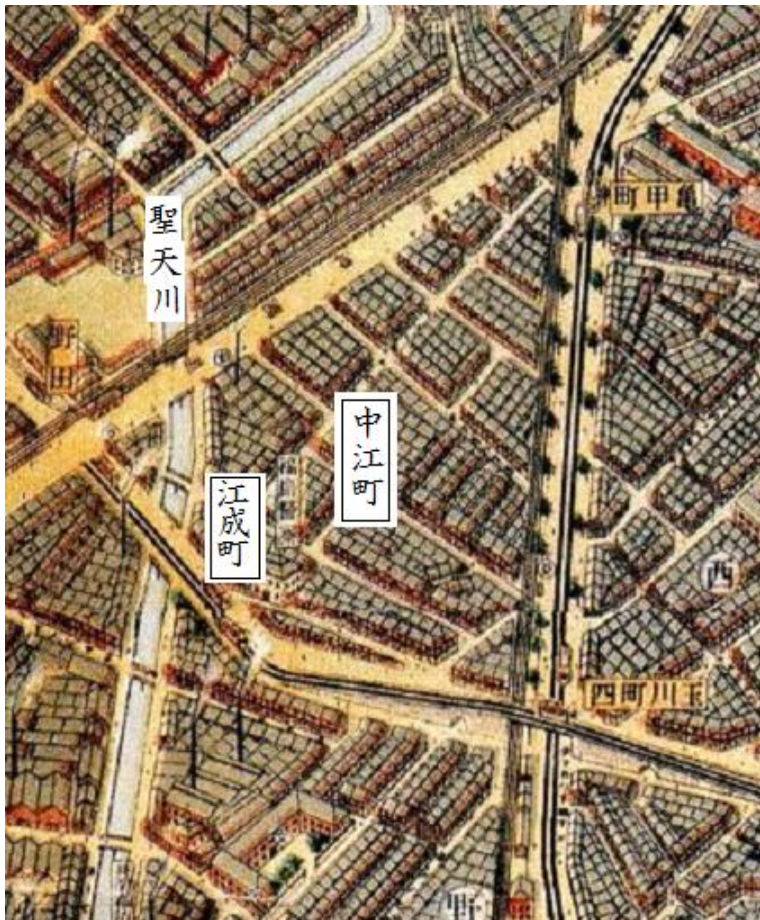
が出来ると、一軒家を借りて呉服屋を始めるが、その気前の良さから失敗。その後、東京や長崎でフランス人の美容師から洋髪技術を習得し、大正一四年（一九二五）一二月には此花区玉川町（現在は福島区玉川）で「ミスマル美粧院」を開く。こちらの方は意外なほど繁盛したという。

『女紋』は昭和四一年（一九六六）、菊田一夫の脚本演出により日比谷芸術座で舞台化され、昭和四二年には、NETテレビ（後のテレビ朝日）の「ポロラ名作劇場」でドラマ化される。主演は、月丘夢路であった。

ちなみに、昭和四一年には福島区ゆかりの作家、田辺聖子さんと対談をしている。このとき、蘭子は満七二歳であった。

そして、昭和五一年（一九七六）一月、池田蘭子の死をもって立川文庫は終焉を迎えた。

* 立川文庫から生まれたヒーロー「猿飛佐助」は売れに売れた。ただ、旭堂南陵は自著で、「江戸時代から猿飛佐助の名は存在し、決して立川文庫や山田酔神達の創造ではない」と書いている。



『大阪市パノラマ地図』
（日下わらじ屋 一九二四）

より部分図



* 大正一〇年に野田にできた「新しい商店街」がどの商店街を指すのか、また玉川の「ミスマル美粧院」がどこにあったかは、いろいろな人に尋ねてはみましたが、特定できませんでした。

何か当時の情報をお持ちでしたら、ご一報下さい。

注

- ① 『女紋』池田蘭子 河出書房新社 一九六〇
- ② 『現代の作家』中野好夫 岩波新書 一九五五
- ③ 『立川文庫の英雄たち』足立巻一 文和書房 一九八〇

その他の参考図書

- 『大正の文庫王 立川熊次郎と「立川文庫」』
姫路文学館 二〇〇四
- 『大阪人物辞典』三善貞司 清文堂出版 二〇〇〇
- 『大阪春秋』第一二八号「立川文庫追跡」川口玄
新風書房 二〇〇七
- 『大阪春秋』第二〇〇号「日吉屋お敬「立川文庫」」加藤政一
大阪春秋社 一九七九



下福島公園の今昔

—公園以前と、その周辺を含む地域の変遷—

岡倉光男

はじめに

福島区福島四丁目（一部は玉川一丁目）に在る下福島公園のことを、地元では、戦後暫くは、「日紡グラウンド」といつていた。最近でこそ「下福島公園」又は略して「下福島」という人が多くなったが、それでも若者や小中学生は、「下福島グラウンド」、区の関係者と諸団体の人達は「下福島運動場」と呼んでいる。それは憩いの空間である緑とベンチ、それに児童遊具など公園施設もあるが、野球が出来るグラウンドがあるからで、その周囲は高さ約五、五メートルの金網製防球柵で囲われていて、金網の外側に沿って舗装されたジョギングコース（ランニングトラック）がある。南側には、室内プールとトレーニングジムがある二階建ての屋舎があつて、周りの樹木の生育も著しいが、全体としてスポーツ施設の観が強い、広大な公園となっている。公園の管理は、大阪市建設局西部方面公園事務所（鞆公園内）が行っている。

一 公園の出来るまで

公園敷地となった場所は、明治の初めまで、西成郡上福島村と野田村の田畑と葦原地で、農作物の種類は、米が第一で、裏作としては主として菜種が作られた。

一八七五（明治八）年五月、敷地内の北西側を斜めに横断して、国有鉄道安治川支線の線路が敷設され、一八七七年末まで、SL（貨客車両を連結した蒸気機関車）が**蔦進**（ぼくしん）していた。

線路が撤去され、暫くは静かな郊外の田園風景であった地、

中之天神近傍の上福島村二千三百三十四番屋敷に、**⑩伝法紡績会社**が、一町二反四畝六歩（約一二、三五六平方メートル）の土地を求め、一八九三（明治二六）年四月、**福島紡績**として開業した。その後、本社第一工場として、建坪一、二七〇余坪を拡張、一八九七年五月には、第二工場竣工、紡機一〇、三〇〇**錘**、職工は、男女九七〇余名がいた。

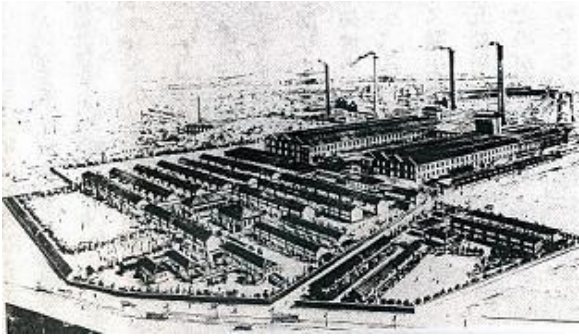
一九一九（大正八）年、福島紡績は本社工場を売却して、堂島大橋南詰の北区玉江町二丁目に移転。翌年三月末に、大**福紡**に引き渡し、同社工場となる。

また福島紡績の西と、その北側に在った、**日本紡績**は、福島紡績と同時期の一八九四（明治二七）年創立で、下福島村大

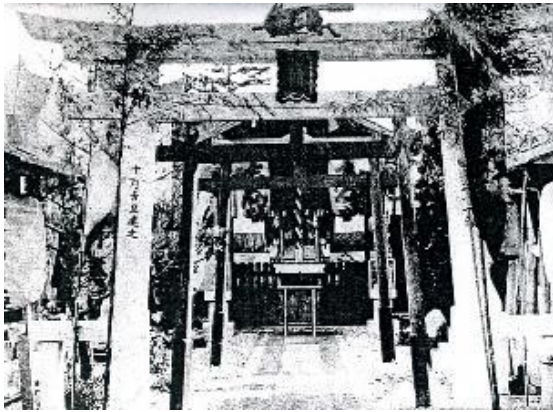
字下福島番外九十八番屋敷に、土地約五〇、二二〇平方メートル、工场上棟式は翌年四月、一八九六年一月に営業を開始した。次の年、一**官紡績**と合併、一九一六（大正五）年には、**尼崎紡績**と合併、工場名を**尼崎紡績福島工場**と変更した。一九一八年には**摂津紡績**と合併、会社名を定める際に、日本屈指の大会社への発展は勿論、海外雄飛の意味を含めて、同六月一日に、大**日本紡績**（後年のニチボーから現在ユニチカ）と変更した。



『明治四十四年頃の現福島区』（中島陽二氏作成）より



工場全景
『大日本紡績株式会社五十年記要』1941 より



福島稲荷神社
『福島紡績株式会社五十年記』1942 より

福島四丁目二、(大阪福島タワー東側)のTさん宅の庭に、往時紡績会社の敷地内にあった**福島稲荷神社**の痕跡があり、高さ一メートル九〇センチの立派な灯籠二基と、狐像の台座が残っている。一基の竿には、「日本紡績」と彫られ、もう一基は、「奉献」とあり裏面に「明治四十年四月三日 日本綿花株式会社」の彫刻がある。福島稲荷神社は、戦後長らく鳥居・お社が鎮座

していたが、伏見のお稲荷さんから神官に来てもらい、丁寧にお願いをして頂いて、一式を伏見にお返しした。またTさん宅の北側と、南隣二軒の東側に沿って」の形で、高さ約四・五メートルの赤レンガ塀が、長さ約四〇メートル分残っていて、創

業時の塀の一部が現存している。今はもう亡くなられたTさんのお話では、高い塀は、当時の女工さんが逃げないように造られたといわれていたが、そうではなく、火事の類焼を防ぐ為に高く造られたもので、現に一九〇九(明治四二)年七月末、翌朝、北の大火(天満焼け)の時と、第二次大戦の空襲被災時に、立派に延焼防止の役割を果たしている。

前記大福紡績は、二年後に大日本紡績に吸収された。敷地は現在のユニライフ福島(前、白鳳荘(大日紡社員寮) 日章倶楽部テニスコート)、北側の玉川小学校、野田スカイハイツ(前、大蔵省タバコ専売局)、四十五階建ての大阪福島タワー(前、大阪日産自動車本社・丸石自転車大阪支店)、大阪厚生年金病院(目下、耐震建替え(十三階建て) 工事中、「大阪病院」の名称になる予定)を含む広大な地所を占め、工場内には線路があり、原材料・製品の運搬に使われていた。市電の堂島大橋北詰(福島西通間が開通したのは、一九二八(昭和三)年四月であるが、その用地買収に際して、紡績会社の敷地の一部を、大阪市に提供した。その為、今でもあみだ池筋に接した歩道脇に、切断された痕跡のあるレンガ塀が現存している。

その後、建物が二階建ての旧式のものであり、レンガ塀の外

側は、商家が軒を並べ、工場には不適當な場所柄になってきたので、一九三六年八月七日を最後に、運転を中止した。紡績機械の大部分は尼崎・一宮・津守・垂井、その他の工場に移転。建物は社員住宅の一部を残すのみで、全て取り壊された。

下福島一丁目を含む地図の上辺に、**大阪工科学校**の記載がある。設立は一九一五（大正四）年、入学資格は小学尋常科卒業程度で、予科・本科・高等科各一年であった。昭和九年度より昼間から夜間授業になり、三〇〇人前後の入学者の内、中途退学者が多く、卒業者は毎年、五・六〇名であった。また現在天王寺区寺田町にある興国高校は、一九二六（大正十五）年の創立時は、**興國商業学校**として、大阪工科学校の木造三階建校舎の一部を借りて仮校舎から出発したが、一年ほどで移転した。



公園開設直前の地図

『最新此花区地図』一九四二より

大阪工科学校は、一九四五（昭和二十）年六月一日の空襲で被災、終戦後すぐ廃校になったと思われる。

二 下福島公園の誕生

下福島公園は、戦時下の一九四二（昭和一七）年五月に開園した。開園時はここが「此花区下福島一丁目」であったのが、公園名の由来となった。

公園西南出入り口、ユニライフ福島とグリーンテラスアオキの両マンション間の東南の植え込み中に、地上高一メートル五センチ、直径二二センチの、通路（表）側に「奉 明治三十一年」と彫られた、玉垣らしきものを再利用した円柱形の石碑があり、裏面に「下福島公園 昭和十七年四月開園」と刻印されている。表示面の向きが反対なので、碑の移動か、通路の変更があったと思われるが、開園月の違いがあるので、大阪市建設局公園緑化部公園管理課に問い合わせ、五月一日が公式開園日との資料を頂いた。

公園面積は、三八・〇二九平方メートルでスタート、その後の周辺地買収により、現在は四一、三〇七平方メートルで、市内でも有数の大規模公園である。

戦時下の開園は、公園のもつ緑地と憩いの性格から、一見異常と思われるが、現在ここが災害時の**広域避難場所**に指定され

ているように、当時も、防災上の意識が多分にあった筈である。

公園東側の植え込みに、地上高八一センチ、幅二〇×一六センチの石碑がある。一面に「此花區町會勤勞奉仕記」とあり、「記」の字の真中か

ら下が土中に埋もれている。推測だが、

公園発足時に、当時



此花区であった近辺の方々が、公園整備に協力した記念に建てたもので、地中の部分に、作業終了時の年月が彫られたと思われる。翌一九四三年四月、福島区が発足した。

戦時下の空襲が予想された一九四三年、公園は、陸軍高射砲陣地に転用された。西側に在った階段状のすり鉢様に囲まれた相撲の土俵場と、その北側にあった徒歩池を除き、爆風逃しの為か、高さ三〜四メートルの土を盛った小山が連続して連なる中央に、高射砲が二門据え付けられた。近くに兵舎と頑丈な弾薬庫、東側からの通路があった筈だが、よく分からない。高射砲の射程は高度六、〇〇〇メートルであった。その後野田阪神駅前南側に移動されたとの話もあるが、阪神前に据え付けられたのは、射程八、〇〇〇メートルの新式砲であって、六〜八門

の高射砲が据え付けられ、米軍爆撃機B29を一機撃墜している。連山のように在った小山は、戦後暫くして平らに地ならしされた。その為、公園は周辺の土地より、現在も約五〇センチ高くなっている。前記の勤勞奉仕記念碑も、半分近くが埋もれた。

一九四六年四月、二種仮設住宅が、堂島大橋寄りの公園出入口を入った場所に、一二〇戸建設された。平屋長屋形式の木造バラックで、六棟はあったと思う。一九五五年前後に撤去された。

三 戦後初の大阪本場所開催

一九四八(昭和二三)年十月、公園内の特設国技館で大相撲、大阪では戦後初の本場所の興行があった。

城東区関目にあった国技館は、空襲の被弾に遭って使えず、一九四六年六月、阿倍野橋際の日本相撲協会の土地で、晴天の一日間、大場所が開催され、優勝は琴錦。翌年三月、大阪準本場所も阿倍野で開催、優勝は照国であった。

福島区の下福島公園内の北辺は、市ではなく日本相撲協会が戦前買っていた土地であった。テント地ではあったが、丸太造りの屋根を張った仮設国技館で本(秋)場所として開催、一一

日間興行、五日目に横綱陣（照国・前田山・羽黒山（全休））は全滅、優勝は関脇増位山であった。場所後の番付編成会議で大関東富士は横綱推挙、増位山の大関昇進が決まった。

翌一九四九年の秋場所も、下福島公園で開催、現在と同じ一五日間となる。大関千代ノ山が一三勝二敗で優勝。横綱前田山は本場所途中腸炎で休場中後楽園球場へ行き、巨人軍とオドー監督率いるサンフランシスコ・シールズとの野球試合を観戦している写真が新聞に掲載され、これが原因で引退に追い込まれた。

千秋楽のあと直ぐ、公園内の日本相撲協会所有の土地は、東京蔵前国技館建設の費用捻出の為、大阪市に一千万円（注1）で売買された。

翌年の秋場所は、阿倍野で開催され、下福島公園での大相撲開催は、前記の二年のみであった。近くの玉川小学校と福島小学校の児童達には、相撲観戦の招待があつて、当時を懐かしく、記憶している方々がおられる。

四 公園内の整備進む

全面が市の土地になって、都市の緑地空間と遊具を備えた公園としての整備がすすめられた。仮設住宅撤去後、一九六一（昭和三六）年、野球が二試合出来る運動場、その後ブルーが設け

られたほか、一周四八〇メートルのジョギングコースも造られ、日常、緑に囲まれたコースを多くの方が健康維持と増進の為利用されている。

児童遊具場、砂場と北側バスケットボールのゴールポスト一基の間に、「ライオンズの森」がある。これは、一九六七（昭和四二）年、大阪市の緑化百年運動に協力した地元の大坂福島ライオンズクラブによって、十年にわたり、色んな木々の植樹を続け、この森の基盤が完成した。

一九七二年夏、痛ましい事故が発生した。堂島大橋寄りの、公園表口を入れて直ぐ左手に、日本水産社宅があり、その北側の公園内にプールがあった。このプールは、校内にプールが無かった下福島中学校PTAの度重なる陳情の結果建設され、同校生徒が主に使用して、当時PTAが管理していた。プールの周囲を巡らしていた金網柵の破れ目から、日水社宅のヨチヨチ歩きの幼児が入り、溺れて亡くなった。

その後、一九七七年九月、下福島中学校内にあった「二十一人討死の碑」が玉川コミュニティセンターの敷地に移され、また東洋製缶所有地の譲渡を得て、ようやく校内にプールが造られた。大阪市の中学校では、最も遅い校内プール造成である。

公園内には当初、約一五〇本のフジが植栽されていたが、現在はフジ生育の為に、間隔を広くする必要上、多くが間引かれ、

六十（株）本が現認される。野田フジ発祥の地である春日神社が公園から近い西方に在って、福島区内有志の集まり、「のだふじの会」の方々が丹精込めて手入れをされている。公園内の藤棚は、去年、白色のフジは咲いたが、薄紫色のフジは、八割方つぼみの段階で鳩に啄ばまれた。今年はネットを被せる対策を採るとのことで、大いに満開が期待できそうだ。

また公園東側に立派な日本庭園がある。一九七三年、公園西約一三〇メートルの、現在新たにわ筋に面している影藤（大神）社の西側にあった、「藤庵の庭」（阪神

高速道路建設で土地が買収されて取り壊されるところであった）を、これも大阪福島ライオンズクラブの尽力で、大阪市が移築作業をした。藤家は、江戸時代、代々野田村の庄屋を勤めた家柄で、現在十八代目の藤三郎氏（当歴史研究会会員）が、「のだふじの会」の世話を熱心にされている。筆者（岡倉）

は、元の場所にあった枯山水の庭を拝見したことがあるが、庭の右手奥、滝が落ちているような景色の上手に、二抱えもある



藤庵の庭

樟の木があつて、全体が鬱蒼とした感じであつた。

また、一九九五年から大阪市内で旧町名継承碑の建設が始まり、翌年、公園西側入口に「平松町」の碑が建てられた。

五 公園現況とエピソード

公園開園以来、今年で七十二年、整備されて後、実質約六〇年、さすがに樹木も高さ二〇メートルを超える成長を遂げているものもあり、都会のオアシスとしての、それなりの趣おもむきと風格のある公園と成っている。

植え込みや、生垣に使われている樹木は、常緑・落葉の低木・小高木など、十六種を数える。くちなし・ヤブツバキ・ユキヤナギ・アセビ・サザンカ・アオキ・ドウダンツツジ等々である。

成長著しい高木樹木は、大阪府の木に指定されている銀杏の木が最も多く、晩秋には黄葉のトンネルが出来、見事な並木道となる。その他、フェニックス・樺けやき・赤松・杉ひのき・檜ひのき・桜・楠等々、観察すると、公園に似合う木々のさながら、オンパレードである。

公園表入口直ぐの左右と、児童遊具（低鉄棒・円形のジャングルジム・雲梯・滑り台・ブランコ・砂場等）の両側に、それ

ぞれ、長さ三〇〜七〇メートル前後の、藤棚があり、棚下では何組もの熱心に将棋をする人達が居られる。また東側の公園境界に、往年より使われて古色そのままの、長さ約六〇メートル、高さ一・四メートルのレンガ塀

(紡績工場の名残)が今も残っている。外側に回ると、高さは、一・九メートルあり、公園側の地盤が高いことが判る、また塀の上部が、不自然に切られた痕があるので、構造物(レンガ?)があつて、塀がより高かつたことを偲ばせる。



一九九五(平成七)年一月、阪神・淡路大震災が発生した。東京読売巨人軍の定宿であつた、芦屋のホテル竹園が被害を受けて使えなくなり、対阪神戦のときは、選手達は中之島のロイヤルホテルに宿泊した。その際、いつも午前九時過ぎ、長嶋監督以下コーチ陣四〜六名が、下福島公園のジョギングコースを使い、一般の利用者の注目を浴びた。周辺に住むご婦人達が、各自色紙を用意、長嶋監督にサインを求めた。ジョギング中にも関わらず、気安く希望者を並べて全員にサイン、毎回のことで、その人気は絶大であつた。又いわゆる、犬を連れて大阪のオバチャン達の「監督好き」に応えて、長嶋曰く「阪神フ

アンじゃないの・・・(笑)」。時には、野球をしていた中学生が、気軽に監督から声を掛けられ、未だにその時のことを、誇らしく「野球を教えて貰った」と、話す人もおられる。

広大なグラウンドのある公園敷地は、災害時の広域避難場所に指定され、消防ポンプ収納庫や防災備蓄倉庫があり、南西側地下に耐震性貯水槽が設置されている。

グラウンドでは、近くの保育園児や中学生の体育の授業、犬の散歩者の利用もあり、土日は、軟式野球試合が常に行われ、平日午後、暗くなるまで、小学生クラスが多いが、複数のサッカー教室やキックボールの練習に明け暮れている人達の元気な声が響きわたっている。

春秋には、区内の学童達の、ソフトボールやキックボール大会が毎年開催され、また秋には、「区民まつり」が開催され、テント張りのブースを多数設置。中央の広場で種々の演舞・催し・区民総おどり等が行われ、翌日には、各大学同好会出演の「福島よってこいや祭り」が元気いっぱい挙行されている。昨年九月二一日、私共の福島区歴史研究会もブースを一つ頂いて、歴史クイズ他の企画で初参加し、用意した解答用紙が無くなる人気を得た。

南側の市営下福島プールは、二〇〇一年改築され、二階にトレーニングジムとスタジオがオープン。二〇〇五年より、指定

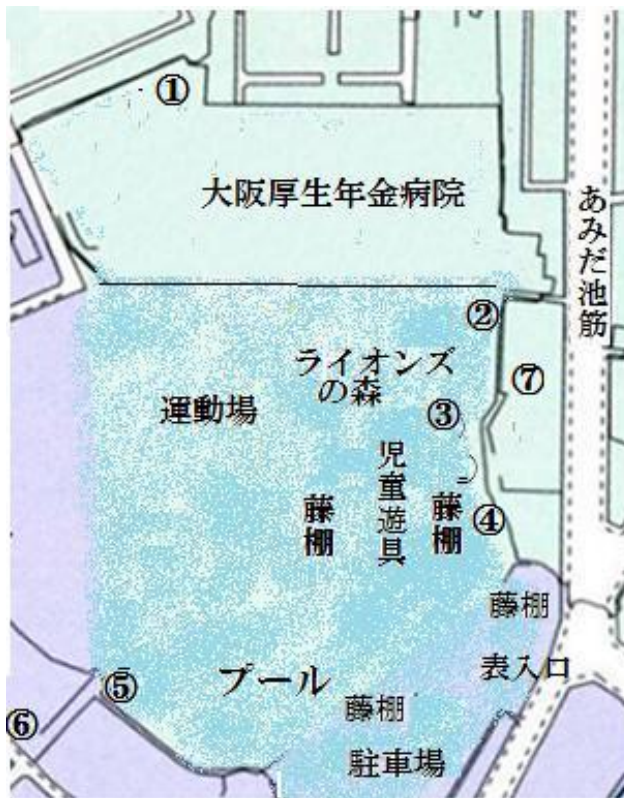
管理者制度によって、民間のコナミスポーツ^株が市から委託され運営している。二十五メートル八コースの室内温水プールと、夏のみ使用の子供用の屋外プールがあり、近年は、大人コースや零才六か月の赤ちゃんから、学童の水泳教室の申し込みが、順番待ちになるほど盛んで、将来の水泳選手を目指す子達も交じって、常に勢いよく水飛沫があがっている。

一九六四年の東京オリンピック以降。急激なモータリゼーションの発展によって、公園周辺道路に利用者による不法駐車が増え、問題が多発した。市当局は、前述の日本水産社宅とテニスコート場を買収、二〇〇一年四月、一・一〇〇平方メートル、四〇台分の**有料駐車場**を確保、藤棚も増設した。

結 び

紡績工場跡地のお蔭で、まとまった広さを有する土地が、銃後の守りが大事と叫ばれている時局の最中に、大規模公園として具現した。

都会にあって、公園はオアシス（砂漠の中の緑地）のようなもの、といわれるが、緑地空間の雰囲気による憩いと、広場の遊びと運動は、人の健康保持に欠かせないもので、また時には、鍛錬の場でもある。心身共に豊かで価値ある人生を送るために、大いに利用・活用するとともに、その維持と美化に、より関心と協力が、求められるところである。



- ① 創業時のレンガ塀と福島稲荷神社痕跡（もと日本紡績）
- ② レンガ塀（もと福島紡績）
- ③ 藤庵の庭
- ④ 石碑「此花區町會勤勞奉仕記」
- ⑤ 石碑「下福島公園開園・・・」
- ⑥ 旧町名継承碑 平松町
- ⑦ 中の天神跡碑

〔注1〕一九四九（昭和二四）年秋の物価参考

正面栈敷（桝席）の大人一人当りの入場料 四〇〇円

教員の初任給 三九九一円

巡査の初任給（六月時） 三七七二円

そば一杯 一五円 ラーメン一杯 二三円

〔値段の明治・大正・昭和風俗史 正・続・続々〕

朝日新聞社 一九八一〜八二 より）

参考文献等

『福島紡績株式会社五十年記』一九四二

『大日本紡績株式会社五十年記要』一九四一

『福島区史』一九九三

『本日晴天興行なり』小島貞二著 読売新聞社 一九九五

『福島てんこもり』No. 18 二〇一一

『下福島中学校三十周年記念誌』一九七七

『大阪市学事統計』昭和五年度 大阪市教育部編・刊

高瀬善方氏の講演「福島区ができたころ」二〇一三年十月六日



区民まつりに初参加

事務局長 末廣 訂

昨年は福島区制七十周年の記念すべき年であったが、区のチ
ラシ等に「福島区制七十周年」という文字が目立ったぐらいで、
福島区として特別に企画した行事はなかった。

当歴史研究会では、一昨年から区の七十周年にちなんだ行事
を考えていたが、福島図書館郷土資料展示室で三月八日〜六月
三〇日まで「福島区70年のあゆみ」展を開催し、主に昭和一
八年前後の出来事や写真の展示を試みた（区役所でも七月八日
から一二月二七日まで展示）。

また、一〇月六日には区民センター三階会議室で昭和ひとけ
た生まれの三人の方に「福島区ができたころ」というタイトル
で記念講演会を開き、約一〇〇名の方が参加し、地元ケーブル
テレビのベイコムが取材して盛り上がった。

もう一つ、初めての経験であるが、九月二一日（土）の区民
まつりにテントを出して、歴史クイズと福島区の史跡・文化財
の写真展示をした。

七月二四日、区民センター会議室で注意事項やブースの配列、雨天時の対策等の打ち合せ会議があり出席した。歴史クイズの問題や全問正解者に渡す合格証書などの作成、そして賞品の買い付けを事前に準備をした。

区民まつり前日に区民センターから展示用のボードを借り、当日は早朝より数名の会員が会場に集まり、展示やクイズの準備、記念誌の販売コーナーの設置をして、午前一回と午後一回の歴史クイズを実施した。

歴史クイズは二人が大きな鐘ベルを鳴らしてスタートし、クイズの用紙を配ったが、大勢の人が珍しいのか熱心にクイズに取り組み、午前、午後とも三〇分ほどでアットいう間に終わった。

我々会員は回答をチェックし、賞品を手渡し、また全問正解者には、太田会長から賞状の読み上げと賞品をわたすイベントもした。ただ全問正解者は一〇〇人強参加したが、九人しかおらず意外であった。

途中、数人の会員からビール、おでん、果物等の差し入れ等があり、また激励訪問をいただくなど、初めての出店行事が終わった。

反省点は会の行事にしては準備や当日の参加者が少なかったので、少数の会員に暑い中負担をかけたこと、テント内のパネルや配置にもう少し工夫がほしかったが、初めての参加にしてはママアアの成果があったと思う



吉野小学校「子供お楽しみ会」に協力して

武田 博

一〇月初めに吉野小学校「子どもお楽しみ会」実行委員の方より末廣訂幹事長に福島区のクイズと史跡のパネルの提供の要望があり、準備した。

平成二五年一月一〇日(日)、吉野小学校に於いて「子どもお楽しみ会」が開催された。吉野小学校の校長とPTA会長の挨拶があり、クイズの問題と福島区の史跡のパネルを提供した当会の太田会長も挨拶した。

続いて福島区吉野連合会の逸見会長より昔の福島区と吉野小学校校区のお話を小学生の児童にもわかりやすく問題のヒントを交えながらユーモアたっぷりに講話された。気持ちと体の緊張をほぐすべく、フツピー、クツピーと一緒に体操をした。そのような雰囲気では半ばまで進んだとき、司会者がクイズのヒントは講堂のなかのパネルに隠されているというので、皆グループに別れ、キャーキャーいいながら、ちらばっていった。準備した展示物を、大人も含めて興味深そうに見て回り。参加した研究会会員は質問などに対応した。そしてお待ちかねの「お楽しみクイズ」を司会者が読み上げた。もう一人の司会者が正解を読み上げると、正解者は飛びあがって歓喜の声あげてよろこん

でいた。間違った者は床をたたいてくやしがっていた。クイズを繰り返すうちに時間は過ぎ終了となった。手には賞品、胸の内には一つ賢くなったとうれしそうに帰っていった。

学校、PTA、地域一体となって無事成功したと思う。

なお、地元ケーブルTVの取材があり、翌週数分放映された。



福島区歴史研究会 2013年下半期の事業

展示「福島区70年のあゆみ」(会場・福島区役所) 7/8～12/27

展示「福島区の史跡と文化財」



(会場・福島図書館) 7/9～10/31

第10回セミナー「大阪の民俗—「餓鬼島伝説」を軸に」 7/21 講師 田野 登氏

区民まつり 9/21 展示・クイズなど (会場 下福島公園)

講演会「福島区ができたころ—福島区創設70周年記念講演会 昭和ひとけた三人衆が福島
区の今昔を語る—」 10/6 講師 今井啓貴氏・高瀬善方氏・吉崎昌作氏

(会場 区民センター会議室) *ベイコムTV取材・放映

第11回セミナー「古代難波宮の時代の福島を考える」 11/10 講師 長山雅一氏

2013年 下半期の活動記録

7/4 展示準備 (図書館・区役所)

7/16 企画会議

7/22 勉強会 (HP揭示版の使い方)

7/24 区民まつり実行委員会

8/20 企画会議

9/2 9/20 9/21 区民まつり準備

9/19 企画会議

10月 『福島区歴史研究会会報 創刊号』発刊

10/6 講演会「福島区ができたころ」設営

10/6 懇親会 (会場 新北京)

10/17 企画会議

10/26 故田渕氏資料受取・搬出

11/4 展示撤去 (図書館)

11/10 吉野小学校PTAお楽しみ会 (11/8、11/11準備等) *ベイコムTV取材・放映

11/21 企画会議

★浦江塾 (協力) 7/6 9/7 10/5 11/2 12/7

(印刷: 谷口印刷)

